

建築のデザインは結局、ディテールとプロポーションなんですよ、という話は、何度となく先輩たちから聞いた覚えがある。それは構法にも様式にも変化の少ないときの話で、言うまでもなくその背景には、安定した社会と安定した技術の裏づけがあったからである。

技術が安定していれば、新建材もなく、新構法もないし、社会の枠組みが安定していれば建築にかかわる法規も変わらないから、そのために建物の形が変わることもない。そうした中で、少しでも見栄えのする建築となれば、プロポーションとディテールのよいものになる。この場合のディテールは、技術のディテールではなくて、形のディテールである。柱の面(めん)、畳の縁、ふすまの枠、軒の厚さ、のような細かい寸法から、軒先の表情、手摺の始末、建具金物の形など細部のデザイン、ということになる。一方、プロポーションの場合なら、床の間の間口に対する落とし掛けの高さ、建具、開口部の縦横の比、軒の出と建物全体とのバランスなど、ということになる。

日本でも、ヨーロッパでも、優れた伝統的建築の多くは、職人と、それを設計したり注文した人たちの、経験豊かで洗練された目になかったものが残っているのである。

逆に、技術が発展しつつある過程では、次々と出現する新しい技術が時間を掛けて熟成する暇をもたないから、多くの技術が完成された姿を見届ける間もなく使い捨てにされる。同様に、社会が不安定な時代には、社会機構そのものも常に未完成であるので、猫の目のように変わる規制によって建物も無様(ぶざま)な形をさらけ出して、その後始末をしなければならなくなる。

社会の規制や技術の寿命が、建物の朽ちる時間より短いと、建物は朽ちる前に既存不適格のレッテルを張られたり、近代設備から取り残された不都合な建物となったりして、生命力が衰える。そんな時代には、建物を長持ちさせる必要はないし、逆に長持ちさせると、壊すのに手間が掛かるといふ苦情さえ聞くことになる。

第二次世界大戦直後から、高度成長をしつづけてきた日本では、社会の構成も建築の技術も目まぐるしい変わりようをしてきたから、それに追従しなければならなかった建築の生産に、洗練などという暇が与えられなかったのは当然であった。しかしいま、幸か不幸か、日本の経済は、高度成長期を終えたと言われている。新建材、新技術、新構法というものも、一時にくらべれば落ちついている。それが、昔のように安定するかどうかは別として、目まぐるしいほどの勢いを失った分だけでも、技術の寿命は延び、建築の耐用時間も長くなるはずである。社会も、建築に対して今よりは完成度の高いものを期待するであろうし、洗練されたものを求めるようになる。そこで再び、建築はディテールとプロポーションと言われる時代がくるかもしれない。少なくとも、その比重が

増す方向に傾くのはたしかであろう。

それについて、ぜひ考えておかねばならないのは、そのための建築教育についてである。現在の学校教育の中では、ディテールはほとんどの場合、構法の問題としてしか、とらえられていない。それをデザインの問題としてとらえるところまで高めるには、教育期間が足りない、学生の力が及ばない、と言うのはわかる。だがそれでは、デザイナーを志す学生たちにとって、ディテールの面白味が理解されないのではないか。それは、構造や設備にも共通して言えることである。もともと、構造も、設備も、デザインのための道具であるはずなのに、それらをデザインから切り離れた論理として扱えば、研究者には面白くても、デザイナーの興味から外れてしまう。それは、会話を習いたい学生に、まず文法からたたき込もうとする教育方針にも似ている。

そこで、私が提案したいのは、ディテールの教育をデザイン教育の中に取り入れること、あるいは、構法の教育をデザインの視点から始めることである。

それによる違いは、具体的に述べるほうがわかりやすい。例えば、“畳の縁を細くしたい”、“軒の出を長く、しかもシャープにつくりたい”というような形の課題を先に置くのである。そうすると、“畳の縁が弾(はじ)けないためには最小どれほどの幅が必要であるか”また“軒に掛かる加重に対して、どんな構造材料を使い、雨仕舞に対してどんな構法の工夫がありうるか”というように、直ちに構造と構法の問題点が浮き上がる。そこで、利休が目指した細い畳の縁を現代の技術ならさらに細くできるかどうか、雑誌で見る建築家たちのシャープな軒の出をもっとシャープにつくる方法があるかどうか、という先端的なデザインの話に触れることができる。

これらを、構造や構法の基本から説き起こすとしたら、どうなるだろうか。講義が、軒の出や畳の縁に触れるまでに、どれほど時間を必要とするか、講義をどう組み立てても、これほど末端的な技術に触れることはありえないだろうし、それは理論を説く講義としては、筋の見えない極めてつまらないものになるに違いない。

デザイナーのためのディテール教育は、デザインの切り口からはいるべきなのである。それには、実物に対応した図面が見られることが必要である。

本書は、過去25年間に、多くの建築家たちが、知恵を絞り、時間を掛けて作り出したディテールの集積である。技術的には、すでに古いものもある。しかし、完成度が高く、建物として実在するものが大部分である。

若いデザイナーたちのための絶好の教材として、また、ベテランのデザイナーたちにとっての貴重なデータシートとして、さらにアーキテクトと共に仕事をする材料・施工・部品メーカーにとっての得難い参考資料として、広く利用されることを期待したい。(うちだ よしちか、明治大学教授・東京大学名誉教授)